

九 亡びゆくもの、新に興るもの

亡びゆくものと、新に興るものとの対比を考えて、我が光明団の歩みをしてより純粹なものにしたい。

大体亡びゆくものはお上品ではあるが熱がなく、実行力がない。貴族的であり、封建性そのものであることはもちろんである。清盛の父、平忠盛は鳥羽法皇によりてはじめて従五位下に叙せられ昇殿を許された。しかるにそれより僅か三十五年を経て清盛は遂に太政大臣となり、一門悉く栄達して藤原氏に代って権勢をほしいままにした。清盛が太政大臣になってから六年目、承安三年に我が聖人御誕生、その翌々年源空上人浄土宗を開かれたのであるが、清盛が太政大臣になってから僅か十八年目には、平家一族は壇ノ浦に亡んだのである。「おごる平家は久しからず」との後世の諺を生んだ程、亡ぶものの模範的な相をとったのである。すでに貴族的になった彼等には高上りはあつても力がなかった。臥薪嘗胆、遂に立上った源氏の前には、ひとたまりもなく亡んでしまった。

しかるに平家を亡ぼした源氏は、後七年にして頼朝が征夷大将軍となつて鎌倉幕府を開いたが、一族の内部分裂によつて頼家、実朝と三代にして亡んだ。頼朝が将軍となつてから僅かに二十七年目であつた。和せざる者は榮えず。内に分裂する者は亡ぶ。しかるに次に鎌倉の実権を握つた北條氏は、名のみを將軍の上に頂き執権となつて榮え、英主相継いで出で、五世時宗に至つて、元軍十万を討つて勢いよいよ挙る。後、新田義貞によつて滅されるまで、九世百十四年間、北條の天下が続いた。これ北條氏は質素儉約の風を守り、同族相扶け又鎌倉には禅宗おこり、鎌倉武士の中に入り、又執権の中には仏道に心よせる者あり、平家、源氏の轍をふまなかつたのである。この鎌倉時代こそ、親鸞上人は関東に立教聞宗したまい、道元は宋に入つて禅を学び、日蓮は関東に大獅子吼される等、三聖相續いて出られた、日本文化史上の貴重な時代であつた。

我が聖人は、恵まれざる群萌、庶民大衆の父であつた。貴族的な何ものもなかつた。曠野の燈であり、凡夫の父であつた。名利権勢享楽等の何ものもなかつた。唯、苦難の中、人間群落の中に如来の大慈悲のみがあつた。念仏の易行道、如何なるものも救われる大悲本願の宣布のみがあつた。聖人の行歩は悪人凡夫をたちどころに救いたもうた。本願を信じて念仏申せ。如何なる衆生も救はれる。実に聖人こそは如来正覺の立証者、無明長夜の燈炬、生死大海の船筏であつたのだ。相済まぬことだ。情ないことだ。形骸のみ残つて燈は消え、福田には雑草のみ茂つて淨華咲かず。今にしていよいよ祖意に帰り自信教人信、報恩行の為に粉骨碎身せずんば・・・と思うは私のみであらうか。

亡びゆくものには小理窟と小田原評定が多くて、明朗なる決断がない。宗教のことは、身を以て進むものには、直裁簡明、念仏して願往生の一道を生きるより外に何も

のものない。「念仏よりほかに往生の道」存知せずである。全身全霊ただ南無阿弥陀仏に攝取せられて生きる念仏道は簡明である。しかるに込み入った理論があつて、一行一心専復専、「ただ念仏」だけで通ずる切れたものがない。あわれ超世無上の本願も、人間知性の対象となり、囚われたる煩瑣哲学、時代感覚を失つた骨董品となれば、人間の迷ひを寸断するの力を失い、苦悩を超克せしめる力を失い、この世に用なきものとなるであろう。彼の迷信と嘲笑せられ、邪教とよばれつゝも、どしどし社会に進出する新興宗教を見よ。果して彼等に学ぶべき何ものもないであろうか。真理性は希薄であつても、社会におくるものは熱いものである。寒い日には冷たい御馳走よりも、一ぱいの熱い御茶を人は欲する。

新に興るものはあつい情熱に燃え、亡ぶ者には理窟があつて熱がない。この熱即ち時に情夫を起たしめ鬼神を泣かしむ。長袖軟弱すでに貴族となりすました平家は、一度木曾義仲の野人的力がなだれこむや、一たまりもなく破れてしまつたではないか。人を見れば自ら高く居り、興るものを見れば迷信だ邪教だ異解者だと言つていゝ間に、あはれ宗教的貴族たちは、世に取り残され、滅ぶ者の哀れさを愚痴に埋もれているだけではあるまいか。

亡びゆく者には徹底せる報恩行がない。今新に興るものは、全身全我を挙げて宗教のため道のために奉仕しているではないか。一人の行者を得るために彼等の払う努力を見よ。しかるに亡ぶ者は、道に寄食して、偷安ちゆうあん為すことなく、他に奉仕を求めて自ら奉仕せず、「如来大悲の恩徳は身を粉にしても」と歌ひつつ、遂に歌嘆儀式の文句に終る。徹底せる報恩行、一生を貫いて全身これ報謝、この人なくして正法の興隆はあり得ないであろう。

新に興るものは、強固なる團結によつて起つ。熱き同志愛によつて一丸となる。滅ぶ者は、見よ、甲も念仏、乙も念仏でありつつ、互いに反目嫉妬、表面一つに見えて内心互いに成算されざる一物を蔵して、犬猿の間となる。その一物とは、自己肯定の自力我執、未だ金剛の鉄槌によつて粉碎されず、未だ真実大悲の溶鋤炉に入つて熔融されざる、自力我慢の頑石がものをいうのである。全我をひっさげて教法に打当り、残るところなくこの自力を捨てて、合掌して全我を大衆の中におけ。

声の大きいものは大声を真実と肯定し、声の小さいものは低声を真実と肯定し、能弁は能弁を肯定し、咄弁は咄弁を肯定するも、声の大小、話の上手下手、全て真実にあらず。一切を大悲久遠の真実、普徧広大の威力の太行の前に投出して、直ちに彼の願力に乗じて、念仏界裡に合掌せよ、万人を化して一つにする力を与えられるであろう。

自己の我慢は棚にあげて、人を善悪によつて裁く者、同朋中の癌と知れ。真に念仏する凡愚なる百人は、以て正法の礎石たるべく、自力を成算せざる一人の賢者は、和合僧を破る提婆たるべし。この賢者即ち獅子心中の虫というべし。念仏して愚者となれ。愚者となりて念仏申せ。

亡ぶ者は、八方美人である。世の迫害批判攻撃のみを恐れて一道を進まない。新に興るものは、必ず嵐の中に立つ。古来の歴史を見よ。聖賢偉人先駆者、一人として嵐の中に立たぬものがあつたか。事なかれ主義の人があつたか。新に興るものは必ず無意味なる迫害の中に立つ。正しく歩めば歩むほど真剣に生きれば生きるほど、非難攻撃の中に立つ。しかし如何に水火は逆巻くとも、歩みきらねばならぬ必然の道がある。謗られても謗つてはならぬ。攻撃されても攻撃してはならない。「この念仏を憎み誹る人を憎み誹ることあるべからず、あはれみをなし悲しむ情をもつべし。」(末灯抄)、憎み誹られてもいい。憎み誹つてはならない。唯念仏一道を精進すべきである。

新に興るものはよく精進する。亡ぶものは懈怠である。精進しよう。いよいよ全我的な精進を続けよう。一人精進して一貫すれば、必ず大千応感動の盛儀が展開されるであろう。仏力によるが故に。我等は同胞と共に、大悲によつて温き団結の下に、静かに不退転に精進を続けよう。年は暮れんとす。新しき決意の下に新しき年を迎えよう。